

# 白金葎

7月号



平成 28 年 7 月発行

第 65 号

白金葭定例会句会等案内

八月十九日（金） 11:30～15:30 懇談会（上野広小路梅の花）

九月十六日（金） 12:00～15:00 ア（工作室） 螳螂、秋薊

十月七日（金） 10:30～15:30 吟行句会（駒場）

十月二十一日（金） 12:00～15:00 ア第三兼題…栗、行秋

十一月一日（火） 法隆寺夢殿の救世観音他拝観

十一月十八日（金） ア 12:00～15:00 兼題…未定

月例会会報（'16/7/15） 10名 蓮見船吟行

飯田孝三

梅雨礫ボート百艘叩きづめ

子燕に餌やる指先梅雨しとど

白鳥にスワンボートに梅雨風

この沼の蓮見の舟にもう会へぬ

梅雨の外梁に見あげる雀かな

増田陽一

子燕や舟宿雨の音ばかり

舟宿の魚拓はためく白雨かな

降り籠めて舟宿に見る浅沙かな

梅雨いまだ上らず沼の底知れず

スワンボート揃ひ沖見る梅雨の果

光成高志

水面に雨跳ね上がる梅雨豪雨

沼南の里山煙る梅雨激し

手賀沼の水天髣髴虎が雨

白鳥親子梅雨入る沼に身じろがず

水槽のあさぎ一輪花咲けり

光みち

荒梅雨や舟宿にゐて魚拓みる

軽鳧の子の棧橋下に雨凌ぐ

梅雨豪雨白布のごとく沼覆ふ

梅雨豪雨見る間にボート沈みゆく

燕の子保護され籠に餌を乞ふ

松村幸一

耳聾となる舟小屋の夕立かな

仲本興正

いつせいに魚拓横向き梅雨を聞き

こんなにも明るくて止まぬ夕立かな

勿体なやあぎとを伝ふ象鼻酒

人の掌の餌に口あけて燕の子

浅野正美

鳥肌のやうな水面や梅雨はげし  
天といふ水底もあり梅雨さ中  
白雨とは沼も岸辺も染まること  
墨絵なす舟溜りあり五月雨  
虚子乗りし蓮見舟なら艚のひびき

梅雨最中空か沼かの切れ目なし

苔咲く昨日今日明日水槽に

手賀沼に屋根打つ音や梅雨明けか

つばめの子口全開でエサねだる

蓮見舟のりばの看板客を待つ

佐藤宏之助

鮎の魚拓眺めて夏の雨やどり  
舟は出ず水槽に咲く苔かな  
月見草階段登る女学生  
餌をねだる燕の子には何あげる  
雨頻り蓮見の舟は出航せず

手賀沼に豪雨蓮花を滅多打ち

出水川濁流となり沼に入る

エンジンは三馬力なり蓮見舟

びよびよと白鳥の仔の甘え鳴き

親雀豪雨の中を餌を採りに

武者昭七

此岸から彼岸に向ふ蓮見舟  
一滴の雨粒に逢ふ梅雨の街  
夏草や馬頭観音の丈のほど  
白蓮華紅の蓮華とツーショット

田宮敦子

木洩日の廂に落ちて寺の春

選句結果(数字は入選数 左添書きは添削句)

- 5 鳥肌のやうな水面や梅雨はげし  
4 鳥肌のやうな水面梅雨止まず  
4 手賀沼に豪雨蓮花を滅多打ち  
4 手賀沼の雨や蓮花を滅多打ち  
4 梅雨礫ボート百艘叩きづめ  
4 青梅雨やボート百艘叩きづめ  
4 梅雨滂沱ボート百艘叩きづめ  
4 子燕や舟宿雨の音ばかり  
3 子燕に舟宿雨の音ばかり  
3 水面に雨跳ね上がる梅雨豪雨  
3 天といふ水底もあり梅雨さ中  
3 天といふ水底のあり梅雨はげし  
3 荒梅雨や舟宿にゐて魚拓みる  
2 梅雨荒や舟宿にゐて魚拓みて  
2 耳聾となる舟小屋の夕立かな  
2 鮒の魚拓眺めて夏の雨やどり  
2 舟宿に魚拓はためく白雨かな  
2 舟宿の魚拓はためく白雨かな  
2 沼南の里山煙る梅雨激し  
2 輕鳧の子の棧橋下に雨凌ぐ

興正

宏之助

孝三

陽一

高志

興正

みち

幸一

敦子

陽一

高志

みち

- 2 いつせいに魚拓横向き梅雨を聞き  
2 降り籠めて舟宿に見る浅沙かな  
2 白雨とは沼も岸辺も染まること  
2 梅雨豪雨白布のごとく沼覆ふ  
2 梅雨最中空か沼かの切れ目なし  
2 出水川濁流となり沼に入る  
2 燕の子に餌やる指先梅雨しとど  
2 子燕に餌やる指先梅雨しとど  
2 梅雨いまだ上らず沼の底知れず  
2 舟は出ず水槽に咲く苔かな  
2 此岸から彼岸に向ふ蓮見舟  
2 一滴の雨粒に逢ふ梅雨の街  
1 こんなにも明るくて止まぬ夕立かな  
1 墨絵なす舟溜りあり五月雨  
1 エンジンは三馬力なり蓮見舟  
1 勿体なやあぎとを伝ふ象鼻酒  
1 夏草や馬頭観音の丈のほど  
1 白蓮華紅の蓮華とツーショット  
1 月見草階段登る女学生  
1 手賀沼に水天彷彿虎が雨  
1 水天彷彿手賀沼に虎が雨  
1 手賀沼の水天髣髴虎が雨  
1 白鳥にスワンボートに梅雨嵐

幸一

陽一

興正

みち

正美

宏之助

孝三

陽一

敦子

昭七

〃

幸一

興正

宏之助

幸一

昭七

〃

敦子

高志

孝三

1 人の掌の餌に口あけて燕の子

1 梅雨豪雨見る間にボート沈みゆく

1 白鳥親子梅雨入る沼に身じろがず

1 水槽のあさぐ一輪花咲けり

1 びよびよと白鳥の仔の甘え鳴き

1 苔咲く昨日今日明日水槽に

1 この沼の蓮見の舟にもう会へぬ

1 蓮見舟のりばの看板客を待つ

1 餌をねだる燕の子には何あげる

1 スワンボート揃ひ沖見る梅雨の果

1 虚子乗りし蓮見舟なら艚のひびき

1 手賀沼に屋根打つ音や梅雨明けか

1 親雀豪雨の中を餌を採りに

1 木洩日の廂に落ちて寺の春

1 雨頻り蓮見の舟は出航せず

1 燕の子保護され籠に餌を乞ふ

1 つばめの子口全開でエサねだる

1 外梁に雀見あげる梅雨の小屋

1 梅雨の外梁に見あげる雀かな

## 一句鑑賞

### 白鳥にスワンボートに梅雨嵐

白鳥は生物、スワンボートは白鳥を模して作った小

幸一

みち

高志

〃

宏之助

正美

孝三

正美

敦子

陽一

興正

正美

宏之助

昭七

敦子

みち

正美

孝三

## 光成高志

孝三

舟、二つは共に梅雨嵐の豪雨に打たれている。白鳥は

首を曲げ羽根を水面に埋めて身じろがず、スワンボ

ートは平気で沖を見つめている。見つめる作者の心は無

論何も書かれていない。そこに余情がある。

いつせいに魚拓横向き梅雨を聞き

幸一

魚拓が梅雨の雨音を聞いていると見立てた。魚拓が

横向きは当たり前、省略すべきと異論が出たが、一斉

に横向きというのは、たくさんの魚拓が一斉に耳を澄

まして聞く様を描写して、魚拓になる前の生きた魚ま

で想像され、ここは横向きは書いておく方が良いと思

う。あはれとユーモアが滲む佳句。(鯛<sup>こち</sup>など扁平な魚は

真上から魚拓にするらしい。尤も手賀沼にはいないが。)

出水川濁流となり沼に入る

宏之助

沼に隣接する公園の地面の土を削り、豪雨が濁流と

なつて沼に飛び込んでゐる。上の道路では車のタイヤ

が水を巻き込みながら走っているのが眺められた。こ

れらに出水川の季語を当てはめて掲句ができたのだ。

あの日の情景を離れても、こういう出水川が想像され

る。実際、手賀沼の上流は大堀川であつて沼に濁流を

運んでいるに違いなく、その水は利根川に出て流れ河

口の銚子から太平洋にそそがれる筈だ。

舟は出ず水槽に咲く蓍かな

敦子

その日のことをいいおほせてある。それで何かあ

る？何もないじゃあないかと云われかねないが、よく読むと、舟を待っている人に結局舟は出せない、欠航だと言われた。がっかりしたけれど、水槽の苔あさぎを見て慰められたという感慨が「かな」の切字に読みとれる。苔の可憐な花の様子が目に浮かぶ。

### 一滴の雨粒に逢ふ梅雨の街

昭七

一滴の雨粒に逢うというのは意外な体験であるが、ありうる梅雨の一日である。一滴の雨粒はきつと頬に当たったのであろう。それつきりであつたのだ。

### 一句鑑賞

飯田孝三

### 水天彷彿手賀沼に虎が雨

高志

今年の蓮見舟吟行は、折しも出舟待ちの舟小屋を、梅雨荒れの集中豪雨が襲い、とうとう沼周辺囑目の陸上吟に変わる。雨はなんと数時間に及んだ。掲句は、一同閉じ込められた小屋から、手賀沼一帯を眺望する。「水天彷彿」ははるかに遠い水と空との境を封じるさま(四字熟語)。一望の景色を余さず捉えて大きい。「虎が雨」の幹旋が憎い。

### 天といふ水底もあり梅雨さ中

興正

さて「天といふ水底」、披露では、今いるここ地球を「天の水底」に見立てたとの受けとめでほぼ一致、さらに、水底が破れたような(豪雨)、(ここが)水底の

ようだ・・など議論を呼んだ。幸一さん提言の「天といふ水底のあり梅雨激し」に賛成したい。野心的な問題作である。

### 舟は出ず水槽に咲く苔かな

敦子

舟小屋に一時間半も降り込められ、身の置きどころない気分で見回すと、一隅、水槽に咲くあさが目にとまる。「見ればまたあさが生ふて沢水は底の心の根をやあらわす」(行家)。水槽のあさに、いつ止むとも知れぬ梅雨荒れに閉ざされた、わが身の姿を見るのだ。末「かな」は、く「見る」もあるかも。

### 子燕や舟宿雨の音ばかり

陽一

遭難して救われた燕の子が飼われ、女主人が懇ろに餌をやっている。あたりの景色も物音も閉ざされた、梅雨荒れの舟小屋の中を跳び交い、雨音だけが耳を衝く。止り木を跳び交う子燕と餌をやる手許に目を注ぐ、陽一さんの姿が見えるようだ。切れ字「や」が利いて、小さな命をいとおしむ思いが沁む。

### 梅雨荒や舟宿にゐて魚拓みて

みち

思わぬ梅雨の豪雨で、一同、舟小屋に閉じ込められる。数年かぶりに加わったのだが、以前は何枚かだった魚拓が二面ある壁いっぱい貼られている。一時間半も足止めされた、やり場のない気もちが、あれこれ

の魚拓に投げる視線によくあらわれる。「ゝゐでゝみて」が奏功。

こんなにも明るくて止まぬ夕立かな

幸一

俗に夕立は馬の背を分けると。すぐ先の空は雲が切れ、日がさして明るい。なのに、ここはまだ降りしきる。どこかに雨宿りしたか、濡れそぼったかはともあれ、誰にもある経験である。a音四畳、口語ふうの詠いぶりが、その場に適い、明るい。きつともう直ぐ止む。「ぬ」の口誦が雨脚の強さを目に見せる。文語口語の混用をいうなら、けだし野暮。

此岸から彼岸に向ふ蓮見舟

昭七

悦子さんの追悼句とみた。i音 a音をたたま韻きは、なだらかで、つくづく哀悼の意をたたえ、三濁音が気を塞ぐ。「向ふ」で決まる、仮に「渡る」では「蓮見舟」の説明になるだろう。別に「一滴の雨粒に逢ふ梅雨の街」の端的な客観詠にも好感。(出句一覽掲載順)

一句鑑賞

武者昭七

手賀沼の水天髯髭虎が雨

高志

「虎が雨」という季語を初めて知りました。「陰暦五月二十八日降る雨。この日曾我十郎が死に、それを悲しんだ愛人の遊女虎御前の涙が雨となって降ると伝え

る。」と広辞苑にはある。「鬼の目にも涙」とはよく聞くけれど虎の号泣ならばなお凄かるう、よくもたとえたものだと感じた。梅雨時の豪雨のことである。残念ながら蓮見舟の吟行句会がこれにあたった。「水天髯髭」は水と空とが一つに溶け合つて見分けのつかないこと。(正美さんの句にも「梅雨最中空か沼かの切れ目なし」とあった。)情景もおおきいが重々しい漢語の響きがいい。虎御前の涙はなによりもこの日に期待していた高志さんの無念の涙かもしれない。

いつせいに魚拓横向き梅雨を聞き

幸一

舟宿にはおおきなフナの魚拓が架かつていたらしい。主人の自慢の品と見える。魚拓が横向きなのは当たり前という指摘があつたけれど「いつせいに」ととらえたところが面白い。号令でもかけられたように壁の干からびた魚どもがいつせいに生き返つて横を向き不安げに豪雨の響きに聞き入っているのだ。魚拓どもも古巣の沼が気になるのか。楽しい幻想だ。

白雨とは沼も岸辺も染まること

興正

沼も岸辺も見分けのつかぬほどに真つ白に染め上げて降りしきる豪雨を眼前にして「なるほど白雨とはよく言つたものよ」と作者は改めて納得しているのである。理屈の句ではない。感動が踊っている。

梅雨豪雨白布のごとく沼覆ふ

みち

降りしきる豪雨の幕に白布（シーツのことか）を連想されたのは日常生活へのこまやかなめくばりあつてのことと拝察した。

こんなにも明るくて止まぬ夕立かな

幸一

口語調の自在な詠みぶりに感動しました。こんなに明るくなってきたのだからもう止むはずと期待しながら一向に止んでくれぬ夕立が恨めしい。平明なうちに日常感覚が光っています。

## 俳窓評論纂

\*「みんな俳句が好きだった」（内藤好之著 一〇〇九）を孝三さんから戴いた。各界百人句のある人生という副題にて、見開き二ページに各人の句と著者の評が載せてある。こういう本は紹介しにくいので気に止まつたもののみを書く。「我為の五月晴とぞなりにける」（徳川慶喜）は幸一さんから虚子の文章を見せられたその句であつた。私も返事を書いて、慶喜の原句を想像したりした。「青衣女人今読み上げし春灯」（筒井盧仏）はしようえによにと読む。修二会の伝承を題材にした句。作者は東大寺住職、阿波野青畝の「かつらぎ」の同人（一八九二—一九七三）「狼星をうかゞふ菊のあるじかな」（宮沢賢治）晩年に俳句を三〇句くらいしか作

っていないが、天文にも詳しくかつた賢治らしい句。宮沢賢治のうたの紹介が昭七さんによつて始まつた。

「ナプキンの角するどしや冬薔薇」（三島由紀夫）。「なめくじも夕映えてをり葱の先」（鮎山實）。私の高校の先輩が静岡大で鮎山教授に習つたとか、あめちゃんと呼んでいたとか、私に盛んに知らせてきたことがあつた。「春浅しまだまだヨハンシュトラウス」（岩城宏之）。

岩城さんは九段坂病院で天使の輪を付ける頸椎の大手術を受けて治つた。私はそのあとで、腰椎の手術を受けた。これはどうでもいいことだが、俳句は文芸だから、己の感情が万人の感情になるような普遍的なものを掴まなければほんとの個性はつかめないが、百人百様に個性的である。

\*「この道に古人なし」（永田龍太郎著）を本の名前に惹かれて衝動買ひした。利休、芭蕉、蕪村、子規と著者の蘊蓄を傾けて縦横に思いを書かれてある。宣長まで敷衍してあり、大和心も触れてある。隔靴搔痒の感もあるが、よく勉強され自論も書かれてある。少し部分的に記すと、芭蕉と蕪村の俳風の違いを述べてある。蕪村は俳諧にさび、しをりなどという勿体ぶつた趣味は面白からずとし、自然味、野性味のままで行こうとした。俳諧を芸術的に開放しようとした意がある。蕪村は画家であつたからだ。芭蕉は発句だけから見たの



では十分でない。連句に於いて、芭蕉は周囲の相手の風によつて自分の風を変えて調子を合わせることできる我執のなかった人で、今の言葉で言えば没自我の天性を持っていた人であつた。私流に解釈すると己と關つて己の特殊性を克服した人、だから普遍的なものを身に帶した人、その努力を怠らなかつた人、本物の芸術家だ。片時も己と戯れていない。

### お便り広場（到着順、敬称略）

梅雨に入り夏野菜が少しずつ採れるようになりました。（書き始めは六月初旬から本日六月二十二日です）先日は御立派な句集を上梓され早々に賜りましたこと有難くうれしく心より厚くお礼申し上げます。こんなにも優れた俳人にお成りになつていらつしやつたのだと改めて仰ぐ思いです。私の方は入門辺りでウロウロしているばかりです。四年目に入るところですが迷いが多く今もこれ以上を望むのは無理なのではといつ止めてもの思いがよぎります。毎月六句提出し、メンバーで選ぶ中に時によい点になつても自分が満足しないものが多く楽しさには遠いまゝです。先生が時に「いい句ができるようになりましょう。」と云われますが「いえ俳句をやっていたんでしょ。」と云われますが「いえ、最初の頃先生から“ハイこれは季語三つです”

等と何度か云われました。」「あそう。それにしてはよく出来ているよ。」とおだてられると「もう少しがんばろう。」と思い直しては今に至っていました。

今回あなたの句集を読ませて頂き「私の進歩は今後もあり得ない」と確信にも似たものがありました。研究どころか学習もしない、又は自分に合つた勉強もできていないことをしっかりと認識致しました。それに対して貴方のまとめられた本はエッセイも句評もしっかり裏打ちされており、句評に於いては温かな目と心が注がれて互いにより成長を今後も続けられることでしょうね。後半の人生が楽しく輝いていく様子が、「まえがき」にも「あとがき」にも生き生きと見えてうれしく思いました。（中略）本来の六十才定年で終えたら広大の聴講生として東広島島の緑の中の大学に通つて古典を学び短歌などに馴染みたいと願つたものですが夢に終わりました。それに比べ貴方の後半人生は御自分の選ばれた目標に向い着々と確かに高みを目ざして進められ、ほんとうに見事と感じ入っております。どうかこれからも尚一層の高みをとお祈り申し上げます。楽しみにです。光成高志様

（7・1 大橋勝子）

（せっかくですので、勝子さんのために少し書きます。「私の進歩は今後あり得ない」とはどうしてわかるのですか。俳句は勉強をすればうまくなるものでもありません。中略した仕事のこ

とはもう終わったこと過去のこと、未来を思つて前進してください。大学に通つて古典を学びなどと書いてありますが、その気になれば大学などへ行かなくても独学できるではありませんか。夢ではなく、今からでもできることです。私の本のことをほめて下さいましてありがたく思いますが、それよりあなたはもう下さいましてありがたく思います。ついている先生はよく知ります。その方が心配です。ついている先生はよく知りませんが、どうも、いい先生とは思えません。例えば「白露や茨の刺にひとつづ」(蕪村)のような客観描写した句を目ざすべきです。ここまで行かなくても、毎日の生活の中から、「絹さやをさつと炒めて朝の膳(長谷川櫂)」のような実感のある句を作られたら楽しくなりますよ。前に京都の舞妓さんのことなど句にされていたようですが、ああいう句には貴女がいませんよ。宮島を遠くから見た句もありましたが、近いのだから毎週でも宮島にわたつて歩き廻つて、まず宮島に親しまれそれから、俳句にしてみるとか、その前に家の周りでも季語はたくさんあります。畑にもあります。季語は一年に一回しか見られませんので、しっかりと見ないと翌年まで待つことになります。うまくできなければ、と姉ちゃん(故大橋鎮子)みたいに、私がバカでしさと云える度胸がなくては俳句なんか出来ませんよ。俳句は度胸。それにたゆみない努力をするという根性！高齡になつて自分を飾つたつて、どうにもなるものではありません。作品を書いて見せて下されば、選句して返しますよ。メールでもいい、作品本位の付き合いすれば輝いてきます。高志

光成さま 6月30日は楽しい時間をありがとうございました。みちさん、絶好調でしたね。俳句もレベルが高く、お料理もおいしかったです！光成さんと違つて、せつかちではなく、ギリギリまでしない人間なので、もう少しして原稿をまとめましたら、お目通しくださいませ。みちさんと、もつとお話したかったです。よろしくお伝えください。集合写真2枚送りいたします。

(木戸敦子 7・2 メール)

白金蔭六月号頂きました。毎日遊んでいます。(中略) 八月十九日(金) 梅の花は私が予約しますが、十人内外の人数を教えて下さい。食事の他、夕食のお弁当も用意します。私の知らない人でも結構です。益々の発展を祈ります。

( 7.1 小山陽也 )

先日はお世話になりました。またご丁寧にご芳志を頂戴いたし誠に有難う御座います。メンバーの方々みんなひとかどの侍らしい様子が面白いですね。「小熊座」にいたことがある方がいたとは驚きました。小生は土曜日は蓮の寺、月曜日は富士川の河原の吟行会で忙しくしております。光成さんも次の十周年を目指し頑張ってください。不順な折ご自愛の上ご健吟を祈念しております取り急ぎ簡単ながら御礼まで。

蓮広葉まろうどの露銀の玉

露懸けて棚蜘蛛蜘蛛の芸術派

## 明け易しコンビナートは灯の埵塙 (7.6 平野ひろし)

(璃子さんの手紙)

昨日今日の温度差十度では私が立つた後の座布団をたぐちに猫が占領するのも領けます。

白金蔭出版記念句会祝賀会盛會裡に終られましたこととお喜び申し上げます。私は六、七月は何かと忙しく、奇妙に何事かが続きますので二日続いて出掛けると半日の用事でも一日はダメになり、何となくヨレ

く気分、これが高齢者なのだと思ひ知らされつゝ性格で無理してしまいます。天袋のものを取り出すために脚立を上り下りしたり換気扇のカバーを新しいのに替えればつく羽根まで掃除したり老人らしからぬ事をしてしまいます。庭の雑草引きをすれば立ち

上がるのが大変、何と云うことでしょうか、六月末ころからスーパで西瓜を何分の一に切ったり大きめのキューブみたいに切つてパックに入れたりして売り

始め、輸入のバナナグレープフルーツ日本のりんご桃などのフルーツの他甘夏なども品薄なので、西瓜の水

つぼさを欲しく丸事でないのが丁度よろしく二度ばかり買いました。そもゝはフルーツか野菜かいずれの

範疇かと考えますが、私事です、父は西瓜が好き、母はキライでした。父は夏に何度か網の袋に入つたのをぶら下げて帰宅し盥に水道水を流しっぱなしにして

冷し、私共姉妹三人縁側に腰かけさせ、エプロンをつ

けさせ、洗面器を一つづつ持たせ側に塩を置いてイザと切り分け食べさせました。母が西瓜ギライの理由は左の通りです。私が子供の頃、母の母つまり私の祖母

が家に居りました。旗本の娘で士農工商の時代の差別意識の中に居たためか、おだやかで大声を出したことも叱られたこともありませんでした、近所の商店の子供と遊ぶと町人の子供と遊ばせるなと母に云つたり

したそうです。祖母は西瓜を車力<sup>シカリキ</sup>、臥煙<sup>カエン</sup>の食物として瓜類は食べさせなかったため、母はおそらく

食はずぎらいだったのだと思います。晩年、私達がすすめると三角に切つた天辺をほんの少々おそるく

口にしましたが格別好きにはならず、父へお義理でたまに買いました。前述の言葉について、洗面器

テレビで説明していたのを聞いて現代人には難解語であるらしく、びつくりしました。私の生家ではなお古

く金だらいと云いました。歯みがき用のコップは、うがい茶碗でした。この二つは一セットで真鍮かアカ

(銅)でした。金だらいは上下の面積は同じ、うがい茶碗は普通のお椀の大きい型でした。バスタオルはつゆとり(露取り)でした。(絵は省略)私の生家は母の実家です。父は養子ではありませんが、京都出の人なので、東京の母の家へ入りました。古くからある物は母の家のものでした。

○車力 大八車などをひいて運搬を業とする人

○臥煙 ①江戸時代の火消人足薦の者

②江戸城の見附の警護に当たった奴

③品性いやしい無頼漢を云う

①―③広辞苑による 臥煙はさんく聞かされた言

葉ながら、こういう字を書くとは近年知りました。多分祖母の育った武家社会は③を云ったと思います(私の解釈)。寝そべって居汚くタバコを吸うような下品者に以上現代社会ではセグリゲーションの最たる者職業に貴賤の別なしで袋叩きかも。

みち

見たことも声を聞いたこともありませんがしみぐいたしました。

蔑切が呼び合っている日暮かな

啓泰

日暮はいつも寂しいです。

気が先走り例の如く乱筆誤字ご判読下さい。ます



璃子さんの封筒  
(H. 28. 7. 18)

くゝ安泰お祈り申し上げます。光成高志様(7.5 璃子) 先日の蓮見舟吟行は、思わぬどしや降りにたたられ残念でした。遠くお越しの敦子さん、興正さんには特にお気の毒でした。けれど、臨場感あふれる句が揃ったのは収穫でした。大変お世話になりました。

(平 28・07・18 飯田孝三)

七月15日吟行のことすっかり忘れました。古代は別便でおくります。会費三千円同封致します。全く勉強していないので申し訳ありません。8月19日梅の花予約しました。和室です。10人以下だと二室、10人以上だと襖を開けて二室となります。私の知らない人でも結構です。前回と同じく？夕食の弁当もタノミしました。数は当日はつきりさせましょう。人数が決まりましたら御連絡下さい。くれぐれも御身体を御大切にして下さい。

(7・19 小山陽也)

先日は蓮見舟どころではない大夕立の洗礼。でも変化に富んだ囁目句が並んで、楽しい句会になりました。あの翌朝、根戸新田の藕糸連の花盛をまのあたりにしながら、貴兄から頂戴した美酒を傾けました。本来ならかの象鼻の金茎を口に咥えつつ、互いに分け合っていただくべき天然の甘露。勿体なく済まなく思いながら。あの藕糸連は、一本で百枚を越える花びらが盛りあがるように重なり合って、ボツとピンクに染ま

つて、まことに艶治を極めます。今朝もこれから出かけようとして、ふと思ひ立つてお札をと一筆しました。来る懇談会、どんなお話が飛び出すか楽しみ楽しみ。

(7・19 土用早朝 松村幸二)

受贈誌 (H 28年7月号)

日雷五右衛門こゝで見得切りし (彩129号) 平野ひろし  
梅雨滂沱浚渫船は錆し島 (〃) 〃

又捨てる掃除機の芥今朝の朝 (〃) 柴崎貞夫

青鳶の中に窓あるレストラン (東京クラブ7月) 文男

味噌蔵に残る匂ひや五月闇 (〃) 守啓

相模野を恋しとぬらす虎が雨 (〃) 晴夫

夏座敷何かと見れば猫のひげ (〃) 璃子

不気味なうた―宮沢賢治・「青びとのながれ」―

武者昭七

賢治の初期の短歌に「青びとのながれ」と題する一連の作品(全十首)がある(大正七年ころ・二十二歳)。不気味な歌だけれど賢治の人間観やら人生観やらを読みとることのできるもの。以下にその全部を掲げる。  
あゝはいつちの河のけしきぞや人と死びととむれながれたり

青じろき流れのなかを死人ながれ人々長きうでもて泳げり

青白きながれのなかにひとびとはながきひなをうごかすうごかす

うしろなるひとは青うでさしのべて前行くものあしをつかめり

溺れ行く人のいかりは青黒き霧と流れて人を灼くなり

あるときは青きうでもてむしりあふ流れのなかの青き亡者ら

青人のひとりにはやく死人のただよへるせなをはみつくしたり

肩せなか喰みつくされししにびとよみがへり来ていかりなげきし

青じろく流るゝ川のその岸にうちあげられし死人のむれ

あたまのみひとをはなれてはぎしりし白きながれをよぎり行くなり

生者と死者とがむれをなして流れるいずこにあると

も知れぬ青白い川といううたい出しがまず不気味である

る。生者と死者はそこで激しく果てしない修羅を演じ

あう。(作者は「ああ」と嘆息する以外になにもできはしない。)

うしろを行くものは前を行く者の足をつかみ、つかま

れて溺れかかったものは怒り狂い青黒い灼熱の霧をあ

びせて相手を焼殺さんとする。亡者同士も又おなじ餓

鬼と化している。死人はよみがえり怒り嘆く。川の岸

には打ち上げられた数知れぬ死人のむくろが重なり合

う。救いのない凄惨な地獄絵である。若き日の賢治の

目にすでにこんなにも凄絶無残な情景が見えていたの

だ。「青じろい流れ」とは業を背負った生者と死者とが

ともに投げ込まれた暗い輪廻の河だろう。死んでもま

たよみがえり永遠に抜け出すことのできない川。その

絶望感。最後のうたには「ああかがやきの四月の底をはぎしり燃えてゆききする おれはひとりの修羅なのだ」とうたった賢治の面影が見えてこないだろうか。

(2016・04・12)

## 芭蕉のかるみ以後の閑話休題

光成高志

先に銀座での拡大句会の後残った四人は上野で歓談、帰宅の車中幸一さんと芭蕉の文章に話が及び、私何故か、白炭の句を幸一さんに示した。それから二三日して夢を見た。メルトダウンしたあのデブリという塊を想像した夢である。これも理路整然と説明できない不可思議な心である。白炭なるもの今は備長炭が有名で茶をたてる時使われるし、鰻の蒲焼でも使われる。断面は菊模様をしており、菊炭とも呼ばれている。京都の鴨川東岸の通りを歩いていて、炭を売る店を覗いたことがある。菊炭がショールウインドウに飾られてあった。銀座でもそういう店を見た覚えがある。白炭の製法は、先の本で少し書いた。何故なら、私は石灰石を焼いて生石灰を作る窯の中を覗いたことがある。LNGという天然ガスを燃やして蒸気を起こす発電所の窯を覗いたこともある。発電は石灰といってもコークスという調整した石灰を燃やして蒸気を起こしその蒸気圧力でタービンを回して電気を起こすのだ。鉄を作る

のも熱を出さねば溶かせないのだ。鍛冶屋は炭を燃やして鉄を柔らかくして鍛え鋼をつくる。白炭の作り方も知った上で芭蕉も白石も神野忠知も俳諧を作ったに違いない。いや知らずに伝承から想像したかも知れぬ。

白炭やかの浦島が老の箱 (炭)  
白炭や燐きつねび消て馬の骨 (炭竈)  
白炭や焼かぬ昔の雪の枝

浅草 桐蔭

忠知

三人の句を並べて見て、これを味わうと時代を感じる。作者の個性も出ている。桃青の句は、そもそも白炭なるもの、あの浦島太郎が玉手箱を開けて忽ち白髪頭になったようなものだという。浅草 桐蔭と云うのは新井白石の俳号であるが、狐が狐火を灯していたのが、夜明けとともにその狐火が消えて、後には狐の啜えていた馬の骨に白炭が似ているという句。忠知のは、白炭を見ていると、焼く前の昔の木の枝に白雪の積もっている原木を想像させるという句。桃青の句の玉手箱は白炭の縁語として茶会の炭箱の箱を掛けている。白石の句は白炭を馬の骨に見立てた句だと単純には受け取れない凄さをもっている。何故なら、『本朝食鑑』(元禄〇年刊)には、狐が人間の頭蓋骨や馬の骨で光を作るという記述もあり、後の明和時代の『訓蒙天地弁』、江戸後期の『想山著聞奇集』にも同じく、狐が馬の骨を啜えて火を灯すとの記述があることから、白石はこの

ような伝承を既に知っていたのである。自伝の「折りたく柴の記」には、祖父の時代は戦国時代であり、戦場の有様も聞いていたのではないだろうか。祖父が藩主を諫めるのに縁側に長い間正座していると蚊が飛んできて顔や首筋を刺す。手で叩くことなく、蚊に血を吸わせれば腹いっぱいになってポロリと顔から落ちるとか、螢の光や窓の雪で本を読んで勉強したとか、堂々と書かれてあって、浪人時代、耐えがたきを忍び忍び難きを忍んで勉強したとかいう文章を読むと終戦の詔書の言葉の元はここにあったのかと思う。そういう白石が、桃青などと競り合つたと室鳩巢に語つたというのも大袈裟ではないと思えてくる。ただ、右のような物語など何かに依拠する談林俳諧は行き詰まってしまふ。忠知はいち早くそれを感じて五十一歳で自刃したし、白石は正風俳諧を模索することなく、俳諧を好きになつては喬木を下りて幽谷に入ることになつてしまふと思つてやめてしまった。桃青はこんな生活でよいのかと思ひ悩み「倦んで放擲せん」と思つたことが何回かあったのだ。深川に転居するときの前書きの冒頭の「九年の春秋」が桃青の苦悩の時間だつたのだ。

(H 28.7.5)

## 我孫子日記

6/17	例会
6/18	駅
6/22	SOA
6/24	通夜
6/25	葬儀
6/29	SOA
6/30	銀座
*	7/8
*2	八重洲
	7/13
*3	蓮見
	7/15
	例会

\*デパ地下の剥き空豆に水子なし

高志

冬瓜の縦に立てたる四つ並び

長崎の生椎茸の大きかり

売る万願寺唐辛子おぼんざい

大茄子に小さきラベル熊本産

砲弾を凌ぐ大きき黒西瓜

潮吹いて浅蜷売場に活気あり

みち

\*2 ビル隙間柊青き実をつける

高志

\*3 蓮沼の大き軒の牛蛙

〃

蓮群に溺れる如く蓮見舟

〃

アリオてふ大型店の稚鰯ちりさかな

〃

## 編集後記

水天髻髯は頼山陽の次の漢詩に出てくる。ふつと思ひ出したので、眼前の情景はこれだと思つて、手賀沼の水天髻髯とやつたものです。おぼろげな記憶で鹿兒島沖だとかいい加減なことを口走りしましたが、長崎から天草に渡る天草灘の船上で作られたもので、「泊天草洋」の詩（古詩）を訓読みで書いておきます。

雲か山か呉か越か 水天髻髯青一髪 万里舟を泊す天  
草の洋 煙は篷窓に横たわって日漸く没す 瞥見す大  
魚の波間に跳るを 太白船に当って明月に似たり

(一八二八 山陽39歳の夏。)

頼山陽はみちさんの郷竹原の出であり、私の郷の神  
辺の菅茶山と親交があったというところで、私は心ひそ  
かに思うところがある。スペースもあるので、PRで  
はありませんが、一寸山陽のことを書いておきます。

19世紀初めに活躍した文人であって、なんと言ったら  
よいか、封建制度の桎梏<sup>しごく</sup>を抜けて自由人になった  
学者と云つたらいいか。同時代人としては、宣長、尊  
徳、一茶がいます。蕪村の晩年が引つかかっている。

身體髮膚之を父母に受く敢て毀傷<sup>キショウ</sup>せざるは孝の  
始めなり とか、鞭聲<sup>ペンセイ</sup>肅々夜過河 とかいふ詩が有名  
です。日本外史という歴史書を書いて死んだが、後世  
の青年識者に多大の影響を与え、明治維新の原動力に  
なったと言われています。以下は私の考えたことです。

昔の学問は漢文であつたので山陽の書いたものは全部  
漢文、無論詩も漢詩である。話し言葉はない。宣長は  
当時の話し言葉を漢文で書かれた古事記を翻訳した。  
古人の口ぶりが手に取るようにわかるまでになった人  
で、源氏物語は小説として価値があるのだと初めて認  
めた学者であつた。人との心の交流を和歌で交わす紫

式部の物語もいいが、山陽のように漢詩でもって交誼  
を結ぶというのも日本人の魂に触れる思いだ。現代は  
これを読むのも難しくなっている。別の機会によく読  
んでみたいと思います。思うだけかも知れないが。

裏表紙の今後の予定書の通り、八月は句会を休み、  
懇談会にします。その代わり十月七日(金)に吟行会  
を行い、十月二十一日(金)に例会、十月尽は奈良行  
となります。私の個人的理由で夢殿の救世観音に拘っ  
ています。「いゃんばい」(飯田孝三さん)の四句目に  
ある湖北・渡岸寺の十一面観音像の方が綺麗だよ忠告  
してくれた人もありましたが、右のような理由でまず  
夢殿に参ります。新しいことをすると、若いとき見え  
なかったものが見えて来たり、わからなかった事がわ  
かってくるという楽しみがありますので、以上の予定  
を実行しようと思っています。

白金霞7月号(第65号) 平成28年7月発行

編集・発行人 光成高志…(〇四―七一八七―一〇六八)

発行所 270-1119 我孫子市南新木2-14-17

表紙の題字…加納綾女。写真…7月20日の白金霞